

タイトル：2025年度 教育セミナー（第21回）

日時：2025年9月18日（木）～21日（日）

場所：東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所 3階 大会議室（303）

「現代チュニジアを駆動する名誉と屈辱—イスラームと女性をめぐる論争を中心に」

近田 佳乃（神戸大学大学院国際文化学研究科 博士前期課程2年）

私は発表者兼参加者として、2025年度中東☆イスラーム教育セミナーに参加いたしました。日頃は文化人類学コースに所属しチュニジアを研究している私は、此度のセミナーで地域研究的な視点を学び、博士課程に向けた研究をさらに一歩進めるためのフィードバックを得たいと考え、応募を決めました。発表内容は、修士論文の報告というよりも、博士課程での研究構想を見据えて練り上げたものです。

口頭発表の持ち時間は45分と十分にあり、専門が異なる聴衆にも伝わるよう丁寧に説明することができました。約20分間の質疑応答では、複数の先生から多角的な質問・コメントをいただきました。司会をご担当いただいた後藤絵美先生は、発表の背後にある意図を丁寧に汲み取ってください、批判にとどまらず、研究の良さを伸ばすための建設的な助言をくださいました。その言葉は私にとって非常に大きな励みとなりました。第一線でご活躍される先生方のこうした議論姿勢からも多くを学ぶことができました。

セミナーでは、鷺見朗子先生と秋葉淳先生、坂梨祥先生がご自身の研究の変遷や研究を進めていく際の考え方について、また岡本正明先生、野田仁先生、黒木英充先生が具体的な研究内容についてご講義くださいました。歴史学や政治学の視点から新たな知見を得られたばかりでなく、議論の組み立て方やプレゼンテーションの技法など、今後取り入れたい点も多くありました。講義の最中に自分の研究との接点がふと見え、章立てが浮かんだ瞬間もありました。

また、休憩時間や懇親会では互いの研究内容について自由に意見交換し、議論を重ねる機会が多くありました。自分の発表に対して寄せられた先生方や学生の考えに耳を傾けるうちに、今後考えてゆくべき課題だけでなく、自らのアイデアの潜在的な可能性までもがより鮮明に見えてきました。

さらに、本セミナーは次世代を担う修士課程の学生が全国から集い、互いに学び合う非常に貴重な場でした。パレスチナ文学からティムール朝の天文学まで、専門は多岐にわたり、ユニークな視点を備えた学生が勢揃いしていました。印象的だったのは、参加者の誰もが「自分のアイデアをいかに緻密に論証し、議論を面白くするか」を真剣に考え、それを心から楽しんでいたことです。すでに研究者としての積極的な姿勢を身につけた彼らの姿に刺激を受け、私もまた研究者を志した当初の熱意を思い出しながら、新たな気持ちで帰路につきました。

神戸に戻った後、私はこの経験を踏まえ、別途構想していた修士論文の重点を大きく見直す決断をしました。セミナーで得た示唆をもとに、従来のアイデアを新たな角度から検証し、課題と可能性を再発見したのです。その結果、本セミナーでの発表内容を修士論文の中心に据える方向へと舵を切りました。

振り返れば、この 4 日間の経験は、私にとって研究を飛躍的に前進させる転機となりました。近藤信彰所長をはじめ、本セミナーの開催にあたりご尽力くださいました皆様に心より御礼申し上げます。この度は誠にありがとうございました。